

私なりの恩返し

和水支部 中嶋 亮太

私の祖父は農業者でした。三度の飯より仕事が好き、朝から晩までがむしゃらに働くことに喜びを感じる根っからの仕事人間。そんな彼が、仕事と同じくらい大切にしていたことがありました。それは自分の所属するコミュニティーへの貢献です。若手の農業者に教えを説いたり、資材を融通したりといった農業分野での貢献はもちろん、地域行事の世話人や無縁墓地の管理など、忙しい仕事の合間を縫って熱心に打ち込んでいました。

子供のころ、墓地の掃除を手伝いながら「なんでこんながんばるの？」と訊ねたことがあります。祖父は一言「俺なりの恩返し」と答えるだけでした。わかるようなわからんような…幼い私は「まあじいちゃんいいひとだしな」と納得し、それ以上は質問しませんでした。

月日が流れ、成長した私は地元を離れ都会へと出ましたが、色々あって自殺を図る程に打ちのめされ、実家に帰り祖父の元で働きながら暮らすことになりました。

子供の頃にお手伝い位ならやった事はありませんでしたが、初めて本格的に体験する農業は恐ろしく大変でした。今でも古傷が痛む度、折れた右足を引き摺りながら肥料袋を担いで回った地獄の日々を思い出します。

そして、こんな仕事をこなしながら地域への貢献を欠かさない祖父の凄さを改めて痛感しました。

青壮年部からのお誘いが来たのは、それから数年後の事でした。始めのうちは仕事が忙しいからとお断りしていたのですが、「まあ始めは顔出すだけでもいいからおいでよ」と繰り返し勧誘され、ものは試しと研修に参加することになりました。

初めての研修先はイチゴ農家。参加者たちは疑問に思ったことを質問し、受け入れ先の盟友はそのすべてへ懇切丁寧に説明する。その光景に、私はある種のカルチャーショックのようなものを受けました。これほど容易く自身の技術や知識を詳（つまび）らかにするのか……この人たちは特別仲が良いのか？それとも盟友同士はこれが普通なのか？

研修後の飲み会で、受け入れ先の盟友にその疑問をぶつけると、彼はこう答えました。

「もちろん個人的な関係性もあるよ？でも、うちはJAへの出荷だから、俺一人いいもん作ってもそんなに強みにならんよ。お互いレベルアップして全体が上振れなきゃ意味ないんだよ」

なるほど、そういう考え方もあるのか。ひょっとして祖父が後輩へ熱心に指導していたのも、こんな考えがあったのかな？

感銘を受けた私はその後、正式に青壮年部に加入しました。

盟友たちからは、単純な技術以外のこともたくさん学びました。たまにはハメを外そうぜと皆で大声で歌い大酒を喰らって酔いつぶれたり、きれいなお姉さんのいる飲み屋に入ったのに、女性はほったらかしで農業について熱く語ったり……

こうした交流は忙しい日々に対する気分転換や、盟友への仲間意識をより強くし、精神的な助けとなりました。

さて、当初私は青壮年部を“農業技術を学ぶ勉強会の様なもの”と捉えていましたが、それは組織の一要素に過ぎず、実際には食農教育のためのイベント開催や耕作放棄地の草刈、未婚の盟友に対する婚活や災害地域への支援等々、地域社会への貢献や盟友への支援活動も積極的に行っていました。

平成24年、私は先輩に連れられ、九州北部豪雨で甚大な被害を受けた阿蘇地域への支援へ参加しました。ビニールハウス内へ大量に流れ込んだ山砂や岩を、一輪車に載せてひたすら運び出します。

当時の私は身長173cmに対し体重46kgのガリガリ体系。一緒に参加した別の地域の盟友たちから「大丈夫かコイツ」「絶対最後まで持たないだろ」と心配されましたが、祖父の下で働いて培（つちか）われたガッツで最後まで頑張る事ができました。

「お前見た目の割に根性あるな、よくやった！」盟友からのねぎらいの声。

「本当にありがとうございました」支援先からかけられた感謝の言葉。

青壮年活動の意義を確信した瞬間でした。

同じ年、青年の主張発表大会の支部代表に選ばれました。人に何かを説明するには、それについて人よりも深く知っている必要がある、なんて言葉があります。発表原稿を考えることは、自身の経験や考えを洞察する良い機会になりました。

青壮年部に加入して間もないころ、私は組織が掲げる“共同の力”という言葉、単に盟友同士の助け合いだと捉えていました。

しかし……あの支援先の盟友は、これから J A や行政の支援を受けながら、地域のみならずで協力して復興を目指すのでしょうか。そうした結びつき、支援の輪がなくては農業を続けていくのは難しい。

災害以外でもそうです。考えてみれば、我が家の営農も様々な人々の助けを受けてきました。ハウス加温用のボイラーから重油が漏れ出たとき、近所に住む人々が拳（こぞ）って駆けつけ助けてくれました。父が入院した時も盟友が手伝いに来てくれたし、老朽化したビニールハウスを建て替えるときも J A が行政支援について詳しく教えてくれました。農業は個人ではなく様々なコミュニティと協力して行うもの。

青壮年部の掲げる“共同の力”とは、そういうすべてをひっくるめたものなんじゃないか？ だからこそこれだけ幅広く活動を行ってるんじゃないか？

そうした思いで原稿をまとめ、発表しました。発表の出来はまあその、初めてということとを差し引いても残念な仕上がりでしたが、あのときに私は本当の意味で「自分が青壮年部の盟友である」ことを自覚したのだと思います。

それから十数年が経った現在、私は青壮年部だけでなく、地元の集落や消防団など様々な組織の役職を任されるようになりました。

「なんでこんなにがんばるの？」という、幼き日の私からの問いに、なぜ祖父がああ答えたのか今ならわかる気がします。

昔、珍しく酒に酔った祖父がひたすら独り言を呟く、ということがありました。

「俺みたいなバカが農業で食っていけるのは、農協の頭の良い人たちが（作物を）高く売ってくれるからだ。先生（彼が師と仰ぐ盟友）がなんでも教えてくれるからだ」

家族、友人、同業の仲間に近所の知り合い、とにかくかたっぱしから名を上げていました。多分祖父は日ごろから、自分が様々なコミュニティに生かされ、育てられて来たことを自覚し、感謝していたのでしょう。

介護施設に入った祖父に代わり墓の草刈をしながら、子供のころの自分が今の私を見たらどう思うかなとふと考えました。

持ち回りで仕方なく？ ほかに人がいないから？ 人に頼まれたから？

答えはNOです。

最初の主張発表の時と比べれば、体力・気力は随分と衰えてしまいました。

しかし、幾らかの知恵と感謝の気持ちは、年月の分だけ積みあがっています。

そうした思いを胸に、これからも自分にできることを、「私なりの恩返し」を全力で取り組んでいきます。かつての祖父と同じように。